

2023年3月19日 No.3659 週報上掲載

先週の講壇から

「今あるもので、

マルコによる福音書 6章 30節~44節

聖句「イエスは言われた。『パンは幾つあるのか。見て来なさい。』 弟子たちは確かめて来て、言った。『5つあります。それに魚が2匹です。』」(6:38)

1. 《弟子たち》 もしもイエスさまに出会わなかったら、ペトロはどんな人生を送っていたらかと想像します。あのまま、ガリラヤ湖で漁師をしていたのでしょうか。「受難節」には、世界中どこの教会に行っても、牧師が弟子たちの悪口を言っています。弟子たちの裏切りは讃美歌の歌詞にもあります。弟子たちが地上に降りて来て礼拝に出席しようものなら、きっと居た堪れない気分になるでしょう。
2. 《別の人生》 私も大学院修了後、赴任予定の教会の牧師と意見が合わずに、行き先を見失ったことがあります。あの時、同信伝道会の諸先生が、こんな私のために親身になって動いてくれなければ、レンタルビデオ店の店長に納まっていたことでしょう。あり得たかも知れない別の人生を想像するのです。何とか南大阪教会の補教師として赴任できたものの、当時は、信仰生活のことも聖書のことも分かっていなくて、とても苦しい思いをしました。けれども、あんなに苦しくなかったら、聖書とは出会えなかったでしょう。キリストの弟子たちも、主の御心も御教えの意味も分からず、きっと心苦しかったと思うのです。
3. 《何がある》 「五千人の養い」として知られる記事です。イエスさまは、大勢の群集を憐れんで、空腹を抱えた人たちのために「私たちは何が出来るか？」と尋ねます。弟子たちの答えは「私たちに何も出来ることはありません」「そこまでの義理はありません」「それは私たちの仕事ではありません」ということでした。「出来ません」「無理です」と言う弟子たちに、持っていないことを「出来ない」理由にするのではなくて、イエスさまは「今あるもので、やってみなさい」と勧められました。探してみればゼロでは無いのです。どんなに絶望的な状況に置かれても、私たちの中には、未だ貴重な何かが残っています。それに気付いて行くことが大切です。そこから本当の可能性(奇跡)が始まるのです。

朝日研一朗牧師